



A. 降雨前までに葉と茎の表面に散布液が定着し、乾いていれば、農薬の効果にはほとんど影響ありません。

Q. 農薬散布後に雨が降った場合、農薬の効果はどうなるのでしょうか？

(1) 葉裏に散布液がしつかりとかかること  
病害虫の寄生部位や侵入部位は、表より葉裏の方が圧倒的に多いので、葉裏に散布液がかかるように散布しましよう。

(2) 適期防除を心掛けましょう

害虫は、若齢幼虫や密度が低いうちに防除すれば効果は上がります。害虫が目立ち始めてからでは防除が難しくなるので、適期防除を意識しましょう。

よくあるご質問

**6月～8月は『農薬危害防止運動』実施期間です**  
農薬の使用や保管には、充分注意してください。  
**農薬散布の要点**

一番茶後は基本的に行わないでください。その後の天候が干ばつで推移した場合、回復できないことがあります。

### 一番茶後の施肥

濃度障害による根の傷みを回避するため、速効性化成肥料の場合は、1回の施肥量をちつ素成分で10kg/10a以内にします。二番茶後の施肥の目的は、三番茶を順調に生育させ、夏の間に茶樹に過不足なくちつ素を吸収させることです。三番茶を摘採しない茶園でも、この時期の新芽が翌年一番茶の母枝となるので、充実した枝条にする必要があります。

二番茶摘採後は、適期に施肥が行えるよう、摘採前に準備しておきましょう。降水量も多くなり、速効性化成肥料だと秋までの安定的な肥効が期待できません。有機質肥料などの緩効性肥料がおすすめです。

一番茶後は、基本的には行わないでください。その後の天候が干ばつで推移した場合、回復できないことがあります。

茶指導販売課 亀山毅人



**一番茶後の管理と二番茶対策**

### 一番茶の摘採

一番茶摘採後、45～50日で二番茶の摘採が始まります。二番茶の生育期は気温が高いため、茶葉の生育も早く、硬化速度も速くなります。また、梅雨に入ると摘採期に雨天が続き、計画的に作業が進められないことが予想されます。週間天気予報を確認し、生産計画に沿った適期摘採を心掛けてください。また、高温・多湿で葉傷みが起こりやすいため、生葉の鮮度維持に努め、良質な荒茶製造を心掛けましょう。